研究も改善も農民とともに

～故菱沼達也先生追悼集～

目　次

第Ⅰ部　菱沼先生のあゆみ
略年譜 …… 2
主な著作 …… 4
小評伝　菱沼達也 …… 原田　勉 5

第Ⅱ部　菱沼先生の思い出
一．恩師・先輩・同僚の方々
農村調査の相棒・菱沼達也君 …… 近藤　康男 21
菱沼君と私 …… 浪江　虔 26
「ホトケ」の「ナミダ」 …… 岸本　定吉 34
語り合いたいことが山ほどあるのに …… 細田　友雄 36
菱沼さんとホイットマン …… 須藤　清次 39
二．成田の友人たち
異色の大人 …… 七夕　健 45

菱沼さんへ……湯浅きいち 49
センセと「幽学」一人芝居……石橋 静夫 54
先生、ありがとうございました！……石橋 福井 62

三、研究をともにした方々

「地の技術」の追求……井上 駿 69
生涯愚直の人……江草 恵 72
菱沼先生の影響で牛舎問題に頭を突っ込む……尾崎 繁 75
菱沼達也「新しい畜産学の骨格」に導かれた私の人生……小林忠太郎 79
「むら」の中で思うこと……小松 展之 83
私にとって「菱沼先生」という人……杉浦八十二 86
菱沼先生を偲んで……鈴木 芳夫 88
菱沼先生の笑顔……辻 利彦 90
菱沼先生を偲んで……徳田 新 92
幽学・賢治・そして菱沼先生……西川 裕人 95
菱沼先生の想い出……林 尚孝 99
菱沼先生の思い出……姫田 正美 103
ただいま役人脱皮中……藤田 康樹 107

仙人の風貌 …… 藤橋嘉一郎 110
故菱沼達也先生 …… 藤原　昇 114
「土」より「泥（ドロ）」を思い浮かべる先生 …… 松坂正次郎 117
僧　了達　についての追慕 …… 松田　修平 127
菱沼さんの思い出～凸凹学校校長先生～ …… 増田　澄夫 130
敗戦の激動期に出会った菱沼さんを偲んで …… 三田　雅彦 133
菱沼達也先生の思い出 …… 安富　六郎 136
ドラマドクター・菱沼達也 …… 山田　民雄 138
菱沼先生の思い出～いつも余裕綽綽の菱沼さん～ …… 横田　正信 142

四．東京教育大学総合農学研究室卒業生

菱沼先生と私 …… 岡　龍子 147
菱沼先生との出会いを回顧して …… 中山　正 149
菱沼先生に学んだ農村調査 …… 朝広　伸夫 152
年賀状に描かれたシクラメンの花 …… 野中　進 155
シロカキの追想 …… 星野　良雄 159
群馬県嬬恋村の馬産調査にお供して～先生から学んだこと …… 石塚　勝夫 161
菱沼達也先生を偲ぶ …… 伊藤　忠好 165

ガリ版……森川　辰夫　168
菱沼先生を偲んで……永井　吉人　170
チーズをご馳走になったこと……増島　和亥　173
農村調査の思い出……山下　徹雄　176
総合農学科に学ぶ～菱沼達也先生と共に～……萩原　晃　179
菱沼先生を偲んで……藤島　淑男　183
原点は成田分室……木沢　睦隆　186
調査票……倉本　器征　188
総合農学で身につけたこと……上松　信義　189
母の手土産……新井　孝男　191
菱沼先生と私……内山　雄平　193
生活科の心……長塚　一枝　196
菱沼先生の思い出……真木　肇　199
思い出される師……小山　正雄　201
糞畜論とキレツ排水……中島　紀一　202
「協同」ということ……笹野　武則　208
菱沼先生と関わった四年間……佐々木裕修　211

第Ⅲ部　菱沼達也先生関係資料

一・一人芝居　大原幽学と百姓たち　……217
二・菱沼達也　主要著作目録　……231
附・解題に代えて　……250
三・主著のまえがきと目次　……253
（一）『日本畜産論～農家の経営条件と畜産形態～』　……255
（二）『私の農学概論～農学における人間の研究～』　……261
（三）『成田報告』総目次（一九六〇～一九七四年）　……266
（四）「なりた新聞」縮刷（創刊号・終刊号）
編集後記に代えて～編集同人座談会　……279

菱沼達也先生——人と仕事

出自への反省

B　先生の生涯は社会的な活動をされた時期ごとに大きく分けると、一、青春時代　二、農林省時代　三、東京教育大時代　四、成田新聞時代の四期になるでしょう。青春時代は旧制山形高校から千葉医大への頃ですが、当時の文学青年として出発する。その原点は、やはり旧地主層出身という出自への「反省」から生まれた社会正義への思いでしょう。

C　先生自身は医者の息子ではあるが、本家がかなり大きな地主であり、子どもの頃の思い出話、当時の小作人の話を、出自へのひけ目のようなニュアンスで学生時代によく聞かされた。

E　出身は地主階層だが、菱沼先生の場合はそのことによる村のリーダーとしての自覚というか、強さをもっていたのではない。あくまで、地主階級の出身ということについての負の思いが強かったように思う。

B　正義感から出発した学生時代の反戦運動も、それに続く農民運動へ参加も、当時の権力の前に弾圧される。だが、それによって社会正義を求める志が全て崩れてしまうのではなくて、農民との新しい接点を求めて、獣医学校に入り直して再出発する。このように嵐の中で自分の志をねばり強く持ち続け、戦後も一貫して生きぬいてきたインテリは学者の世界では数少なかったでしょう。

先生の学問の出発

B　民衆というか、農民との結びつきに執念をもっていた先生が、戦時期の困難な時代に、現場を重視する学風の近藤先生に師事することになります。

D　近藤先生の学問の姿勢と実証的な調査研究を主体とする手法にひかれるのですね。

B　そう、必ずしも農業経済学の近藤理論そのものではない。学問の体系から出発するのではなく、経済、経営、技術、労働の一体となった営農の現場の問題解決が自分の課題となっていた。だから先生の学問は始めから総合農学だったのだと思う。

E　そこの体系から入らないところが「研究者菱沼」を世間一般の人に判りにくくしているのではないか。

A　医学では基礎と臨床に分かれている。しかし、直接、患者を診察する臨床の世界もそれなりに学問として尊重されていると思う。先生は「農学には臨床がない」といっていた。患者を助けようとする医者や看護婦さんの働いている病院の雰囲気が好きだ、とも話しておられた。

畜産とシロカキ

B　戦後、農林省を職場として、近藤先生と戦前からのテーマである畜産経営の研究を進められるが、その研究としての特徴は何か。

A　一言でいえば、現実の営農条件のなかに日本型畜産の成熟発展をつくりたいということだったでしょう。

B　そのプログラムをなにかのモデルに求めるのではなく、農家にとって馬と牛とは、畜産とはなにかと

いう問いかけから出発する。その成果が、『日本畜産論』として結実する。その後、高度成長期の加工型畜産の問題については本格的に取組まれなかったが、その以前の日本畜産の原型的な構造分析としては画期的なものだ。

B　シロカキの研究はシロカキが役畜作業でもっとも重労働だったことから出発したのだが、実際の研究としては土自体をめぐる研究として展開していった。先生自身も土そのものの面白さにひかれた面もあったのではないか。素材を丹念に観察することの好きな先生本来へ探求心のあらわれと思う。臨床医のような、この感覚を山崎不二夫先生が評価されたのではないか。

A　私は菱沼先生にとっての問題はシロカキの泥ではなくて、やはり泥と格闘している農民自体が研究の出発点で、土はあくまで研究対象だったと思う。その研究過程で先生のもっている素材分析の恐るべき鋭いセンスが生かされたとは思うが。

B　ただ、先生のシロカキ研究そのものには作業者の分析が弱くて、全体としてみればあくまで土そのものの研究となっていたと思う。極論だが、そのストレスから、成田の仕事に向ったと判断している。土壌研究が本来の自分を生かす研究テーマではないと思われたらしい。

A　農作業研究、農民の健康研究は教育大時代にも進められるが、分析手法が確立していないので中々難かしかった。

B　先生は研究方法が十分に確立しておらず、したがってすぐには研究のテーマにならないような、現場の課題とその解決方法そのものにこだわり、その中味を探求することにさらにこだわるのではないか。その感覚の鋭さは普通の人にはとてもおよばないところがあった。

運動の担い手として

B　運動家としての先生の活躍は、農林省の職場での活動と教育大の筑波問題での活動が主なものでした。戦前の活動そのものはすぐ弾圧されたけれども、その実績と経験は戦後の民主化活動に生かされた。それは職場内の日常活動だけではなく、集団的な農村調査活動にも発揮された。

E　その運動というものは、先生にとって一体なんなのか。戦前の成田での農民運動とか、農林省の職場での労働運動とか、もっと一般的に革命運動とかいう言葉で表現される世界とかの関わりでいうと。

B　先生の場合は具体的な闘争目標があって云々、というのではなくて、その中心的な部分は結局、人と人とを結びつける活動だったのではないか。インテリと農民が結びついて新しい場面をつくるとか。

A　そうだ、人と人との結びつきを創り出すところにポイントがある。先生の人間への働きかけのもっとも鋭いところは、その当人の要求そのものをあきらかにして、本質的に同じ要求をもっている、当人の自覚していない、新しい人との結びつきをつくっていく。運動のもっとも基礎的な部分というか、運動が展開していくエネルギーの根源そのものをあきらかにしていき、ひっぱっていく。

B　古典的な運動のあり方からいうと、その中になにか混乱をもちこむように見えることもあったが、他面からいうと活動が硬直してどうにもならないような時に、全く新しい局面をつくり出すことができるし、実際にそのような運動の姿が私たちの見えるところにあった。活動の新しい土俵づくり、この運動にとって本当の土俵はなにかを提起することができた。

ただ、職場の範囲を越えたもっと大きな世界の問題となると、この先生独自のやり方だけでは、状況が、

そして運動が動かせない場合も少なくなかったように思うが。

東京教育大時代――成田分室での仕事――

B　次の教育大時代になると、成田での仕事が始まります。この仕事はそれまでのような師事される先生がいなくて、先生自身が全く一人で考えてやられた初めての本格的研究、オリジナルな仕事ともいえますが。

A　教育大の前半はシロカキのまとめと、畜産のまとめの時代となる。山崎先生と近藤先生への宿題回答を出して、それまでの農学としてはやるべき仕事をやったことになる。そこで、農民運動の想い出の地である成田市豊住地区で農学研究の新しい出発を目指すことになる。こういう研究フィールドとしては、成田のまえに埼玉県種足がある。ここは鴻巣時代の調査地だが、総農の学生は成田の前はここでいわゆる農家実習をやった。先生自身、それまでつき合っていた学者、研究者のような一人前の大人と異なる私たちのような大学生の教育は苦手だったようだし、悩みもあったと思う。

D　成田での仕事は現地とともにある農学をここで創り出そうという思い、つまり農村にあるあらゆる問題について、既成概念によらず、しかもそれを分析する新しい方法を生みだそうと、それこそ総力で取り組んだ。

C　それにしては学生が少なかったか。

B　学生にもそれぞれ新しい課題に取り組ませたが、なによりも、農家にいって話を聞いてこいという指導だった。

C　「いま判らなくとも良いから、心の中にダイヤモンドを入れるように、話を聞いてこい。そのことが必ずいつか輝いてくるから」ということだった。いまになってみると、それは本当だった。先生の全体像はわからないが、いまでも現場に学ぶという姿勢は忘れられない。

B　成田での方法論の中心はなんといっても参加メンバーによる調査報告会でしょう。その全体像をつかませる訓練としても、方法論としても。

C　その報告自身も具体的な側面も語りながら全体をつかむため、その農家のキャッチフレーズをつくった。

B　その個別の報告をいくつかの類型に分け、その類型間の関連をあきらかにしていくという方法だった。

D　その仕事は、先生の研究としてどう結実していくのか。

B　ここでの仕事はあくまでやりたいことをやってみたのであって、もともとなにか成果を求めるものではなかった。結果のあり方についてはあまり関心がなかったのでは。大きな変動のあったあの時期の継続的かつ総合的な農村調査としては、きちんとまとめられればかなり意義のあるものになったとは思うが。

A　菱沼先生がめざした成田分室の仕事としては『私の農学概論』がまとまったことが最大の成果ではないか。もともと結果にこだわる先生ではないから、あれが出版できたことは望外のこととともいえる。成田分室の仕事にとっても一番大事な時期に先生自身が筑波問題に巻き込まれたという事情もあったが。

B　退官時の先生の遺書のようなものだ。

A　成田分室での仕事についていえば、話に出たように一つは総農教室に限らないが、雑司ヶ谷分校も含め、多くの学生の学習の場となったこと。二つは、『私の農学概論』の刊行だ。三つとしては、総合的農

村調査報告だ。これについては一五年間にわたってまとまり次第、学会、研究会で口頭発表し、全成果をその都度分室報告『村と学校を結ぶ』（第一報～第七報）としても印刷している。残念ながら学問の世界では全く評価されていないから忘れられているが、原論的な観点からは、いつか活用されると思う。さいごの四つめの成果は、各種の営農改善実験だ。稲作、自給的畑作、畑かん導入による集約畑作、農家養鶏、養豚の糞尿処理、それに結びつけるための炭焼きと木酢液生産など学生の卒論と結びつけながらやった。これらは全体として昭和二〇年代の営農改善的発想の取組みとは思うが、それらの中には今日からみても先駆的な取組みもある。農民の健康問題は学生、院生の何人かが継続して取組んだ。食生活問題は当時、岡さんが担当されたが、私は農技研に移ってから献立型として発展させることができた。私の稲作型は不十分なものだったが、中島さんが発展させた。二人ともその成果は不十分かも知れないが、方法論を先生に鍛えてもらったことになる。このようにさきに話に出たが先生は物事を類型的に把える、パターン認識能力に秀れていて、そこに菱沼方法論の本質的な部分のひとつがあると思う。その側面について学問的な評価をする人がまわりにいなかったから、あまりこの成田の成果は発展しなかったが。

「なりた新聞」から幽学へ

A　成田分室というところは結局、先生にしてみればみんながそれぞれが勉強すれば良いという場であった。

B　それで皆んなが去った後は、先生はいわば第二の青春として「修行」の道に入ることになる。「役人脱皮」という「修行」と「出家」の道。もっとも、先生ははじめからいわゆる役人ではなかったが。「な

りた新聞」を書き、発行するというのも「修行」のひとつの過程で、その次に青年期からの宿題である『農魂の人』『幽学』が中心的な仕事となった。

E　『農魂の人』の主人公の一人である実川さんの思想についてはずい分こだわっていた。自分は自分としてやってきたが、それが節を守ることになったのかと。菱沼先生がこだわり続けた問題は「戦前の自分の行動はあれで良かったのか」、端的に言えば転向をめぐる問題だった。『農魂の人』は、ダラ幹と言われながら百姓の運動家として節を通したといえる山本源次郎との対比で、インテリの思想、行動を問う仕事だった。

D　この時期、先生自身は日本の農業なり農民なりに展望をもっていたのだろうか。

B　社会の現実とのかかわりでいえば積極的な展望はなく、一歩引いた形での対応になる。

E　自分の思想遍歴を点検、検証することによってそれこそ後世に託すという姿勢だったのではないか。自分でなにか展望をもつというようり、話合っている、つき合っている若い人たちに期待するのだと。

B　整理し切れない思想上の問題も残るけれども、その次の仕事が大原幽学で、武士たるもの、民衆の中でいかに生きるかというテーマ、その中にそれまでの色々な経験と経過が生かされていく。同時に二宮尊徳も扱おうと試みたけれども、こちらの方は深めることはできなかった。だから、尊徳との対比でみえてくる幽学の仕事というより、武士としての生きざまそのものを探求課題とした。幽学も武士としては捨てられた立場だから、先生自身共感するものがあったのだろう。

E　成田を去った時が、その幽学の仕事に区切りがついた頃だろう。そのあとは体の具合も芳しくなく体力的おとろえも目立ってきていた。

B　この段階での先生のテーマはホイットマンだった。転向の問題のさらに下層にあった文学青年としての先生の青春への回帰とも言えるのではないか。社会との表面的なつながりも断って、ホイットマンに集中することで内面的にも「出家」していたとも言えると思う。この先生の生き方と思想の歩みをみると、やはり近代日本知識人の精神史における優れた典型であると思う。先生が生涯の研究対象とした社会が世紀末的な状況になったところで、現実から離れていくことになる。この間、つまらない世俗に脱線せず、青春期からの一途さを貫ぬいて生き抜いた人だ。

A、森川　辰夫
B、中島　紀一
C、新井　孝男
D、笹野　武則
E、杉浦　八十二

菱沼達也先生追悼集

『研究も改善も農民とともに』

一九九六年十一月発行

編集：『追悼集』編集委員会

代表・森川辰夫／新井孝男・中島紀一・笹野武則・杉浦八十二

（連絡先）〒〇三六

青森県弘前市文京町一　弘前大学教育学部　森川辰夫

TEL　〇一七二（三九）三四三五

印刷：三協社・高橋司郎

〒一六四　東京都中野区中央四―八―九

TEL　〇三（三三八三）七二八一

＊菱沼達也先生の関係資料は左記の図書館に所蔵されています。

財団法人農文協図書館　〒一七七　東京都練馬区立野町一五―四五

TEL　〇三（三九二八）七四四〇